

『浮世風呂』における連体形、準体法、準体助詞について

The Attributive Form, Quasi-nominal Form, and NO-Pronominalization in *Ukiyoburo* (1809–13)

博士後期課程 日本文学専攻 2010年度入学

蔡 欣 吟

TSAI HsinYin

【論文要旨】

連体形準体法の消滅及び準体助詞ノの出現は古代語と現代語との間に起きた大きな変化である。準体助詞ノの活用語の連体形への接続が確立したのは室町末、あるいは江戸初期ごろと推定されており、その後使用が一般化してきたと見られる。本稿は、江戸末期の資料『浮世風呂』における「連体形準体法」、「準体助詞ノ」、「連体形＋名詞」三者の使用状況について、全数調査を行うことにより、準体助詞ノの出現から定着までの間で、それぞれの使用にどのような特徴があるのか、どのような棲み分けをしているのかを明らかにし、連体形準体法の消滅の過程を探ることを目的とする。

『浮世風呂』における活用語の連体形を調査分析した結果、①連体形準体法の衰退期に、準体助詞ノが日常会話から一般化してきた、②準体助詞ノが地の文で使用されないのは文語に接続しないためだと考えられる、③活用語の連体形に下接する助詞に注目すると、この三つの表現の使用傾向が観察されやすい、④準体助詞ノは江戸末期では女性による使用が男性を大幅に上回っており、男女とも上層の使用者が極めて少ないこと、がわかった。

【キーワード】『浮世風呂』、連体形、準体法、準体助詞、式亭三馬

1 はじめに

現代日本語においては一部の慣用句や慣用表現を除いて、活用語の連体形に準体助詞¹ノや形式名詞、一般名詞などが付加されることにより、体言句となって格助詞や係助詞に接続する。だが、

¹ 準体助詞という用語は橋本文法に従う。

近世までは活用語の連体形は、準体助詞や名詞を伴うことなく連体形で体言句を構成できた。この現象は、山田文法で「準体言」と名付けられ、「ここに準体言といへるものは用言の連体形を以て体言の資格に立たしめて使用せるものをいふ²」と定義されている。本稿では他の諸先学の用語に従い、これを活用語の「連体形準体法」と称する。

先行研究においては、吉川泰雄（1950）、中山崇（1950）では、連体終止形に「ノ」が付く用法は江戸時代初期に始まり、次第に発達してきたもので、年代が確かな用例は『耳底記』から見られるとされている。原口裕（1978）は、天保以降の口語資料において、準体助詞ノを接続する形が成熟しており、幕末下級武士の言葉の資料で、準体法を専用する資料である『夢酔独言』に、連用格に準体助詞ノを接続させて体言化する用例がまったく見られないことから、準体法の多少は位相と文体的特徴とを反映すると指摘している。

連体形準体法から準体助詞ノへの変化に関しては、信太知子（1970、1976、1987、1996等）が連体形準体法の消滅に関しての一連の調査分析を行い、連体形準体法の衰退期に、最初は形式名詞が補償したが、連体形準体法の使用率が急激に低下するという決定的な段階で形式名詞が補償しえなくなったため、準体助詞ノが用法を拡大し連体形準体法の機能を補償したとしている。また、柳田征司（1993）では、準体助詞体言句が連体形準体法（氏の論文では「無名詞準体句」）に取って代わったのは、「連体修飾機能と、体言であることとの二つの役割を二つの形態に分担させることによって、明確化した」ためだと述べている。

先行研究では、さまざまな観点から連体形準体法の消滅と準体助詞ノの起源についての調査分析が行われているが、調査対象が会話文に限定されていること、また一般名詞に調査が及んでいないことなど、いくつか検討すべき点があると考えられる。よって、本稿では江戸末期の資料『浮世風呂』における「連体形準体法」、「準体助詞ノ」、「連体形+名詞」三者の使用状況について、全数調査を行うことにより、準体助詞ノの出現から定着までの間で、それぞれの使用にどのような特徴があるのか、どのような棲み分けをしているのかを明らかにし、連体形準体法の消滅の過程を探ることを目的とする。

2 調査対象

本稿では、連体形準体法の衰退期のものである『浮世風呂』における活用語連体形の使用例を調査する。活用語は、用言（動詞、形容詞、形容動詞）および助動詞を指す。ただし、「ぞ」「なむ」「や」（反語）「か」などの係助詞による、いわゆる係り結び文に見られる活用語の連体形については、係り結び文の成立には準体句が関与するとの指摘³はあるが、現代語には存在せず、また、そ

² 山田孝雄（1908）『日本文法論』771頁

³ 信太知子（1996）では、野村剛史氏の整理によれば係り結びの成立は倒置起源説と喚体起源説があり、結びの連体形による句は、前者で準体句、後者で連体形終止文ということになり、連体形終止文が準体句が文末に一致したものとすれば、いずれの場合も準体句が関与すると述べている。

れに取って代わって使用されている用法や形態もないため、形式上は連体形であるが、今回の対象としない。

準体助詞ノの出現する段階において、文末述部に立つ「ノダ」「ノカ」などの用法の成立も見られる。信太（1970）では、断定の助動詞の連体形承接に関する問題は活用語の連体形準体法消滅と関係するものとされているが、連体形準体法の衰退期に、どう推移しているのかについては触れていない。このことについては詳しい検討が必要だと思われる。ただし、現代語における文末述部に立つ準体助詞ノに関しては、「のだ」の用法がモダリティーの意味を有することがしばしば指摘されるのに対して、文中に現れる準体助詞ノにはそれがない。文中表現と区別して扱うほうが妥当であろう。よって、文末述部および断定の助動詞に由来する「ナラ」「ナレバ」「ナレドモ」などについては別稿に譲る。本稿は文中の活用語連体形の使用例のみを対象とする。

また、現代語においては、動詞と形容詞、一部の助動詞などの活用語で終止形と連体形が同じ形態を呈している。そのため、調査の際、終止形なのか連体形なのかが判断しにくいことがある。連体形に順接確定表現「カラ」および接続表現「ガ」が下接する場合、古語では連体形に付くが、現代語では「ダカラ」「ダガ」のように、形態上では終止形接続が見られる。山田文法による連体形準体法に対する定義では、「用言の連体形を以て」ということが指標とされているため、今回『浮世風呂』における活用語連体形の文中用例を収集するにあたっては、用例基準の不一致を回避するため、順接確定表現「カラ」および接続表現「ガ」を調査対象から除外する。

3 調査資料

今回使用した『譚話浮世風呂』（本稿では『浮世風呂』と称す）は文化六～十（1809～1813）年に刊行された滑稽本であり、作者は式亭三馬である。これは江戸の銭湯でのさまざまな登場人物の会話を通じて、江戸市民の日常生活を忠実に表現したものである。全四編で、舞台となる銭湯の男湯と女湯、二編ずつの構成である。『浮世風呂』の言語資料としての性格については、松村明（1957）で次のように述べられている。

本文の中でも割注のうちに、しばしば発音やことばづかいの特徴を説明することばを挿入させている。主な例を拾い出してみると、次のような註のことばが見られる。

○アイといふ返答をア、といふはすべて少女の通り言なり（二編巻の上、「何文字とか豊何とか名告げるべき十八九」の町芸者「ア、」という返事のことばについての註）

（中略）

これらの註は、すべて具体的な会話のやりとりの前後や中間に挿入されているのである。これらの註記の示すところによって補われて、文字の上に載せられた会話のやりとりが、実際に口に上されたときのことばにすこしでも近づかせようと努めたものと認められる。したがって、われわれは、『浮世風呂』一編から、当時の江戸市民の口にのぼされたことばの実際をか

なりこまかく知ることができる。

この指摘からわかるように、式亭三馬の『浮世風呂』は当時の言語生活をかなり忠実に反映したものであり、江戸末期の言語実態を調査するにはふさわしい資料だと思われる。なお、今回の調査では岩波書店『日本古典文学大系 63』を使用する。

また、『日本古典文学大系 63 浮世風呂』の凡例では、校訂にあたっての会話文に関する方針として、「底本のとおりの符号^マをもってあらわす」と記述されている。このことは早稲田大学古典籍総合データベースで『浮世風呂』の底本と照らし合わせ、確認した。『浮世風呂』の底本と活字本においては、符号^マを用いることによって、会話文と割注やト書きを含む地の文との区別がはっきりとしていることがわかる。

4 『浮世風呂』における連体形の使用状況

従来の研究では連体形準体法を調査する際に、発話部分に焦点を当てているものがほとんどである。しかし、現代語においては準体助詞ノの使用は発話に限らず、地の文でも使用されるようになっている。そのため、活用語の連体形を調査するにあたっては、地の文を除外することなく全数調査を行うことにする。『浮世風呂』における活用語の連体形の使用状況は、地の文、会話文、その他に類別する。ここでは、会話文は2人もしくは2人以上の会話を、その他は発話文中の独り言、引用、歌などの類を指す。用法が特殊で、用例が少ないため、その他については全体の用例数を提示するにとどまる。

表1 連体形準体法⁴と準体助詞ノ⁵、連体形+名詞⁶の使用数

地の文			会話文			その他		
準体法	準体助詞	連体形	準体法	準体助詞	連体形	準体法	準体助詞	連体形
77	0	263	226	64	879	17	2	26

文中に使用される活用語連体形は全部で1554例で、地の文においては連体形準体法と連体形+名詞が用いられ、準体助詞ノの使用例は見当たらない。会話文では、連体形準体法に、準体助詞ノの三倍強の使用が見られた。連体形準体法の衰退期に、準体助詞ノが日常会話から一般化してきたことがうかがえる。連体形+名詞は地の文においても会話文においてもほぼ同じくらいの比率で、約7割も占めている。言い換えると、地の文における連体形準体法のみ使用は、会話文における連体形準体法と準体助詞ノの使用の合計にほぼ同じ比率を占めることが見られる。

⁴「連体形準体法」は全ての表の中で「準体法」で表す。

⁵「準体助詞ノ」は全ての表の中で「準体助詞」で表す。

⁶「連体形+名詞」は全ての表の中で「連体形」で表す。

また、地の文においては準体助詞ノの使用が見られないことに注目したい。

ここで、文体から地の文と会話文の差異を検討する。前述したように、式亭三馬は当時の言語を忠実に描写し、三馬の作品を通して江戸言葉の様相がうかがえる。地の文に関しては、『小説神髓』文體論のなかで、「又云式亭三馬などが滑稽物の地乃文をバ時に雅文體にてものせしことあり（中略）純粹なる雅文體にはあらざれどもまた以て我いひゆる雅俗折衷乃文体とハ相異なりたるも乃ともいふべし⁷」と述べられている。地の文における雅文体の使用意図はどうであれ、文体上会話文との相違が認められよう。今回の調査で使用の見られた活用語を確認したところ、地の文においては、活用語の連体形で示すと、過去の助動詞「タル」「シ」、否定の助動詞「ザル」、使役の助動詞「セルル」、動詞「ルル」、形容詞語幹に「キ」、形容動詞語幹に「ナル」などの文語形式が使用されるが、これらは会話文の連体形準体法と準体助詞ノに接続しないことがわかった。室町末期ごろ成立したと推定される準体助詞ノは、江戸後期では文語への接続が認められない。実際の会話から浸透しはじめるのではないかと考えられる。

4.1 上接状況

それぞれの表現が上接する活用語の形態によって、『浮世風呂』における準体助詞ノが文語表現に接続しにくいと推定した。4.1ではさらに詳しく、活用語の種類によってそれぞれ選択しやすい形式があるのかどうかをそれぞれの上接状況から検討する。ここでは上接という用語で「連体形＋名詞」の活用語の「連体形」の部分を表す。連体形準体法については活用語自体を表すことになり、適切な表現とは言いがたいが、仮の総称として使用する。各表現の上接状況を以下の表2にまとめる。なお、表に現れる活用語の形態は活用語の連体形である。また、空欄は使用例がなく、ゼロを示す。

表2 各表現の上接状況

		地 の 文			会 話 文		
		準体法	準体助詞	連体形	準体法	準体助詞	連体形
ヨウ＋	ナ						2
名詞＋	ナル	2		2			5
	デゴザイマス					1	
助動詞	過去・完了	タ		17	28	15	177
		タル	6	27			2
		シ	7	2			1
		ヌル		1			

⁷ 坪内逍遙（1885～86）『小説神髓』下巻、五丁表裏（近代デジタルライブラリーデータベースを使用）

助動詞	否 定	ナイ						2
		ネヘ				5	2	26
		ン				2		3
		ヌ			11	5	1	20
		ザル	1		1			1
		デナキ			1			
		デネヘ						1
		ナンダ				1		
	受 身	レル				3		2
		ルル			1			
	使 役	セル				1	1	
		セルル	1					
	その他	ベキ	1		2			
		ソウナ（様態）			1	1		5
		ラシイ						1
		タイ				1		2
		マス				1	3	4
動 詞		ル	49		137	163	31	366
		ルル	1		1			
形容詞		イ	2		15	14	10	156
		キ	6		27			5
形容動詞（語幹）		ナ			14	1		98
		ナル	1		3			
小 計			77	0	263	226	64	879

地の文には以下のことが見られる。

- ① 過去の助動詞「キ」の連体形「シ」は、連体形準体法で多く使用される。#1は連体形準体法の例で、#2は連体形+名詞の例である。

#1 ^{さる}猿まはしのやうにせなかへ^{おひ}負しは、三ツばかりの女の子。（前編巻の上朝湯）

#2 ^{なだい}名代のひやうきん者とよばれしかみさま、浮世風呂とは一ツながやと見えて、（三編巻の下）

- ② 否定の助動詞「ズ」の連体形「ヌ」は、連体形+名詞での使用のみである。

#3 又常に出さぬ家^にても松の内は茶を出せり。（三編巻の上）

- ③ 完了の助動詞「ヌ」の連体形「ヌル」は、連体形+名詞の1例のみである。

#4 ^{とうろ}燈籠やへと^う賣る聲に、おどろかれぬ^{こゑ}る盆前の^{ばんまえ}証^{むなさわぎ}仲も、^{おや}親の^{こゝろこ}心子しらずとて、（四編巻の上）

- ④ 形容動詞の連体表現は、古語のナリ活用の連体形「ナル」と現代語の活用語尾「ナ」とが両方現れるが、現代語の活用語尾「ナ」は地の文では連体形準体法での使用が見られず、連体形＋名詞に偏る。「形容動詞＋ナル」は用例が少ないが、連体形準体法と連体形＋名詞両方に使用される。

#5 ^{かしこき}賢も^{おろか}愚なるも、^{きせん}貴賤^{おの}の^{おんたく}恩澤^{よく}に^{ひとごころ}浴する人^{こころ}心。(前編巻の上)

#6 ト^{おほき}大きな^{こゑ}声をしてよぶ (三編巻の下)

一方、会話文には以下のことが見られる。

- ① 過去の助動詞「タ」は準体助詞ノに接続する使用が目立つ。連体形準体法での使用は「～タがいい」が全用例の28例中に11例を占める。慣用表現として存在するといえよう。

#7 ^{いゝとこ}好男だと^{おも}思つたのも^{そのとうざ}其當坐ばかりさ。(女房→下女おやす) (二編巻の下)

#8 わしに見こまれたが^{いんぐわ}因果ちや (上方下りけち兵衛→青物売り) (四編巻の中)

#9 ^{せけん}世間の^{むすこ}息子さんがたを^い見たが^い能。(太吉の母→太吉) (前編巻の下、午後)

- ② 地の文では、形容動詞に活用語尾「ナ」をつける使用が連体形準体法で見当たらないのに対し、会話文では1例あり、上方下りの商人の使用である。また、同じ人物は様態の助動詞「サウ」を使用した例が#11であり、活用形の連体形準体法に格助詞ヲが付く言い方が見られる。上方の使用者の使用状況についてはさらなる検討が必要だと思われる。

#10 ^{こゝ}爰な^{きくざ}菊坐の^{おほ}大きな^い能げなナ。(上方下り商人、けち兵衛→青物売り) (四編巻の中)

#11 サア、^{そのなか}其中で^{いちりん}壹里なりと、^{めかた}自方の^{ありさうな}ありさうなをニツくだんせ。(上方下り商人、けち兵衛→青物売り) (四編巻の中)

- ③ 過去否定の助動詞「ナンダ」(終止・連体同形)は連体形準体法のみで使用される。

#12 ^み身が^{おも}重くてしんまくに^をへ^{やう}な^{あし}んだ^{ひつたは}を、漸^{ひつたは}足^{ひつたは}を引倒して、(鉄砲作→直兵衛) (四編巻の上)

以上、連体形準体法、準体助詞ノ、連体形＋名詞それぞれの上接状況の傾向を述べた。文語表現に準体助詞ノが接続しないことは観察された。それ以外、上接の活用語による使用の選択は認めがたい。

4.2 下接状況

各表現の下接状況を表3で示す。各表現の下接状況による使用制限があるのかどうかを見てみる。

表3 各表現の下接状況

	地 の 文			会 話 文		
	準体法	準体助詞	連体形	準体法	準体助詞	連体形
ハ	26		16	27	14	181
ア						8
モ	10		8	28	9	47
ガ	2		5	72	12	154
ニ	9		21	42	13	92
ニハ			1	6		2
ニヤ				1		5
ニモ				4		
ニテ			10			
デ			2	5	6	46
デハ						1
ヲ	19		34	5	7	148
ヲモ				1		
ヲバ						1
ト	2		10		3	15
カラ			4	1		7
ヨリ				2		1
ヨリハ				1		
へ						10
なし	7		124			43
ノ			23			38
マデ				3		2
マデモ				1		
ダケ				4		
ダケニ				1		1
ナド						3
ナンゾ						1
ノミ	1					
バカリ				9		8
ホド	1			13		2
ツツ						1
ヤラ						2
ヤ						2
デモ						3
ダノ						2
(セイ) カ						7
(ヨウ) ニ			3			30
(ヨウ) ナ						9
(ヨウ/名詞) ナル			2			
コッタ						2
コッテモ						5
小 計	77	0	263	226	64	879

まずは地の文においての状況から見てみる。地の文では準体助詞ノが使用されていないため、連体形準体法と連体形＋名詞の両方で比較する。

- ① 連体形準体法への下接が見られないのは、助詞「デ」「ニテ」「カラ」、助詞「ニ」に係助詞「ハ」の付いた「ニハ」、そして名詞が介在しなければいけない「名詞＋ナル」「ノ」である。なお、「(ヨウ)ニ」は「ヨウ」の接続の問題で、ここで比較の対象としない。

#13 トまたぎて、かほをしめながら、まけぬ氣ではなうた（前編巻の上朝湯）

#14 なきごゑまじりのかんばしつたこゑにて（二編巻の下）

#15 おとなしき子には友だちのわんぱくものも、おのづからことばがあらたまるなり（前編巻の下、午後）

#16 最うぬきましたと番頭が、挨拶をする門口から。（三編巻の下）

#17 ^{ゆゐる}弓射といふこゝろなるよし、^{ふる}古き^ま繪さうしにまゝ見^{およ}及びぬ。（前編巻の上朝湯）

#18 主人をしゆる下女^{げぢよ}のことは、はやがはりむねのからくりと申小冊^{せうさつ}に、（二編巻の下）

- ② 表3の中に「なし」と表示する欄があるが、これは連体形準体法と連体形＋名詞に下接する助詞がなく、直接活用語に接続する表現を意味する。

#19 ざとの坊かんがよいといふ所をじまんにて、目あきどうぜんに風呂より出てくるあり。（前編巻の下、午後）

#20 亀喜市右エ門の右に出るものすくなし（三編巻の下）

日本語は近世になって、格の意識と表現形式が明確になるとされるが、連体形準体法と連体形＋名詞に下接する助詞はなく、直接活用語に接続することが見られる。連体形＋名詞より、連体形準体法の場合はいっそう明確性が欠如しているように思われる。このような助詞を介さず活用語に接続する用法は、後に述べるが、『浮世風呂』における会話文では連体形準体法の使用が見当たらない。実際の言語生活において、不明確な用法を使用しないことが進行していたのではないかと考えられる。

一方、会話文には以下のことが見られる。

- ① 会話文では、#21下線部のように現代語で準体助詞ノが使用されるところに、連体形準体法が用いられた。連体形準体法に見られる「活用語＋ニ～」の表現は当時の形態で、現代語にいたって定着した。『浮世風呂』では、「活用語＋ニ～」は「活用語＋に似合わぬ」「活用語＋には及ばない」「活用語＋によって」「活用語＋に限る」などが見られる。

#21 御器量の好に似合ぬお堅いお性でございます。（下女おやす→女房）（二編巻の下）

#22 なにもそんなに棚卸をするにはおよばねへヨ。（13, 4歳子守→34, 5歳乳母）（二編巻の

下)

#23 繁花^{はんくわ}の地^ちは流行^{りうかう}が速^{はや}いによつて、そこで後^{のち}へは踊^{おど}らぬ様^{やう}になつたものさ(甘次→むだ助)(四編巻の上)

#24 下戸^{げこ}は餅^{もち}を食^くふに限^{かぎ}るとおもふのは、チト來^{きた}つた代物^{しろもの}だネ。(むだ助→甘次)(四編巻の上)

- ② 連体形準体法にガが付く用例が多いが、そのうち、「する/したがいい」の使用は、「するガ～」の全72例中51例ほどある。これに対して、準体助詞ノにガの付く「するのがいい」「するのガ悪い」は2例あり、「したのがいい」「したのガ悪い」の使用が見当たらない。また、現代語において忠告表現として使われている「するほうがいい」は『浮世風呂』では1例見られる。

#25 姑^{しやうと}は遠^{とほ}くへ退居^{のいて}るがいゝ。(おとり→おさる)(二編巻の上)

#26 江戸^{えど}で見た^みがいゝ。(甘次→むだ助)(四編巻の上)

#27 利^りも非^ひも構^{かま}はず我子^{わがこ}をしかるのが一番^{いっちょ}能^ようございますよ。(女湯客→女湯客)(二編巻の下)

#28 負^{まけ}て歸^{かへ}るほうか能^よのさネ(女湯客→女湯客)(二編巻の下)

さらに、「する/したがいい」と「するのがいい」について両者の相違を検討する。構文上、まず、準体助詞ノが付く「するのがいい」に評価性を含む「いい」と「悪い」両方が使用されるのに対して、連体形準体法で見られる「する/したがいい」の場合、「悪い」は1例のみで、ほかの50例はすべて「いい」である。そして、前者に「一番」のような副詞と共起することがあるのに対して、後者は副詞と共起しない。準体助詞ノが付く「するのがいい」の使用例は少なく、はっきりと言いきれないが、『浮世風呂』における用例を見る限り、「する/したがいい」は忠告、放任の用法に傾いているが、「するのがいい」はある事柄に対する話し手の評価に使用されるようである。

- ③ 「デ」には連体形準体法と準体助詞ノがともに接続するが、そのうち、接続助詞的に使用される用例は、連体形準体法は5例、準体助詞ノは2例である。現代日本語における順接確定表現「ノデ」は当時、「デ」と拮抗しているが、準体助詞ノに「デ」が付くよりも連体形準体法のほうが優勢を保っている。なお、連体形準体法に「デ」が付く用例はすべて接続助詞的である。

#29 今日^{けふ}はこなたが能^よく流^{なが}して呉^{くれ}たでさつぱり仕ました。(70歳、姑→24, 5歳嫁)(二編巻の下)

#30 錢^{ぜに}がつかへねので據^{よんどころ}なく老實^{まじめ}さ(衰微→鼓八)(四編巻の中)

- ④ 「ニ」は、「デ」と同様に連体形準体法と準体助詞ノがともに接続する。接続助詞的に使用される連体形準体法+「ニ」と認められる用例は20例で、準体助詞ノ+「ニ」は13例ある。「ニ」は格助詞か接続助詞かの判断があいまいであるが、意味上接続助詞的使用は、連体形準体法+「ニ」は準体助詞ノ+「ニ」を上回っている。また、準体助詞ノに「ニ」が付く用例はすべて接続助詞的である。準体助詞ノの付加によって、現代語の「ノニ」で表す前後文の論理関係がいつそう明らかになったと考えられる。

#31 いつでも附馬^{つきま}を曳^{ひきつれ}連^{さんじよ}て、あたり近所^{かつかう}の恰好^{わり}も悪い^{とかくげへぶん}に、兎角^{とかく}外聞^{へぶん}といふ事をしらねへだ
(60近きばあさま→60近きばあさま)(三編巻の下)

#32 夫^{それ}ばかりですめば能^いの^に、田圃^{たんぼ}通^{どほり}を抜^{ぬけ}ました(徳藏→金兵衛)(前編巻の上、朝湯)

- ⑤ 地の文では連体形準体法が助詞を介さず活用語に接続する用法が見られるが、会話文では使用されていない。また、連体形+名詞にのみ接続する表現がある。場所や帰着点を表す格助詞「デ」「ヘ」などが連体形+名詞にのみ付く。連体形+名詞は比較的に明確で、安定している表現と言えよう。

#33 ハテありがたい世^よの中^{なか}、しかも富貴^{ふつき}な御國^{おくに}へ生^うれ出^また事を思ひなさい。(晩右衛門→とび八)(四編巻の上)

#34 あかるい所^{ところ}で勝負^{しやうぶ}しべい(中六→男湯客)(四編巻の下)

- ⑥ 準体助詞ノは格助詞との結合が強いが、副助詞群には接続しない。
⑦ 準体助詞ノは格助詞「ニ」「デ」に接続することが見られるが、係助詞「ハ」「モ」の付いた「ニハ」「ニモ」「デハ」に付くことは見られない。

下接状況から連体形準体法、準体助詞ノ、連体形+名詞を見てきた。下接する助詞によって、それぞれ結合しやすい使用の傾向が認められる。また、下接の助詞ごとにこの三つの表現を観察するのは比較的に有効だと考えられる。

4.3 使用者から見る準体助詞ノの使用

4.2 までは『浮世風呂』における連体形準体法、準体助詞ノ、連体形+名詞それぞれの使用傾向および特徴について文法的観点から検討してきた。江戸末期の資料の会話文に現れる準体助詞ノに、実際の使用者による使用上の差異があるのかを見てみたい。まず、男女別で見る三つの表現の使用を表4で示す。

表4 男女別で見る連体形準体法、準体助詞ノ、連体形+名詞

	準体法	準体助詞	連体形	ノの使用率 ⁸
男性	113	13	428	2.3%
女性	113	51	451	8.3%
合計	226	64	879	

表4からわかるように、『浮世風呂』においては、男女とも準体助詞ノを用いるが、女性の使用は男性の使用を三倍強上回っている。女性は比較的に準体助詞ノを多用することが見られる。それに対し、男性の口頭語では準体助詞ノの浸透が遅れているようである。

階層を重視する江戸時代では、言葉は階層を反映し、また、階層によって言葉遣いの相違が見られるとされている。そこで、準体助詞ノが主にどの階層と年齢層の人物によって使用されるのかを調べておきたい。江戸時代の階層は小松寿雄（1985）、広瀬満希子（1991）を参考として、上層、中層、下層、その他に分類する。その他は、番頭、武士の生酔、玄人筋、推定できない人物などを指す。番頭、武士の生酔、玄人筋をその他に分類するのは、番頭はその職業上、武士の生酔は酔っ払っていて言葉遣いが通常とは異なるため、玄人筋は業種が特殊なためである。階層と年齢層から見る準体助詞ノの使用は以下の表5で示す。

表5 使用者の階層と年齢層から見る準体助詞ノ

		男 性				女 性				
		老年	中年	若年	不明	老年	中年	若年	女子	不明
階 層	上 層			1				1		
	中 層					5	1		2	10
	下 層	1		2		3	8	7		
	その他		1		7		6	5		3

階層と年齢層から見た準体助詞ノの使用で、男女を問わず共通する特徴としては、上層の使用者が極めて少なく、それぞれ若年層の1例のみということが指摘できる。男性による使用は下層に集中している。また、その他のなかで使用場面が判定できるのは、番頭→武士の生酔、武士の生酔→番頭、勇み→武士の生酔（→の左側は話し手、右側は聞き手）などであるが、これは番頭と勇みが酔っ払った武士を相手にする乱暴な場面に属する。また、教育層の鬼角と商人体の点兵衛の間の会話では準体助詞ノの使用が1例ずつあるが、ここでの使用は階層や場面で判断しにくい。一方、女性は、中層と下層とも各年齢層によって準体助詞ノを用いている。

⁸ ノの使用率は準体助詞ノが全体に対する割合を指す。

以上、使用者の性別、階層、年齢層の視点から準体助詞ノを検討してきた。江戸末期では、準体助詞ノは男女ともに使用が見られるが、女性のほうがより多く使用すること、そして、上層の男女はほとんど使用しないことが確認できた。当時の準体助詞ノは特定の階層によって使用され、位相と品位がうかがえる表現であると推定される。

5 まとめ

本稿では、江戸末期の滑稽本『浮世風呂』を資料に、連体形準体法、準体助詞ノ、連体形＋名詞について全数調査を行った。その結果、全体における顕著な特徴として、以下のことが明らかになった。

- ① 『浮世風呂』において、準体助詞ノは地の文での使用が見られず、会話文でのみ使用される。地の文と会話文の文体差と古語の使用といった視点に注目すると、その理由は準体助詞ノは古語に接続しにくいこと、また、準体助詞ノは会話から浸透し始めることが考えられる。
- ② 地の文における連体形準体法のみ使用は、会話文における連体形準体法と準体助詞ノの使用の合計にはほぼ同じ比率を占めることから、『浮世風呂』においては、連体形＋名詞は一定の役割を保っており、連体形準体法の補償は主に準体助詞ノによって行われたことが考えられる。
- ③ 準体助詞ノが付加されることによって、連体形準体法とは形態的に類似するが、意味的な相違のある使用が観察される。また、準体助詞ノに「二」が付く表現は、連体形準体法より論理性が強い。
- ④ 『浮世風呂』の登場人物の発話からは、男女ともに準体助詞ノを使用するが、女性が比較的多く使用し、上層の男女による使用は極めて少ないことがわかった。

『浮世風呂』における連体形準体法、準体助詞ノ、連体形＋名詞の使用状況を確認した。活用語連体形に関わるこの三つの表現は現代日本語に至るまでどのように推移してきたのか、また、文末述部はいかなる様相をなしていたのか、などを解明することを目的とするため、今後年代を広げ、調査資料を増やすことによって、より精密な方法で連体形準体法、準体助詞ノ、連体形＋名詞の推移を探りたい。

参考文献

- 小松寿雄 (1985) 『江戸時代の国語 江戸語——その形成と階層——』東京堂出版
- 阪倉篤義 (1993) 『日本語表現の流れ』岩波書店
- 信太知子 (1970) 「断定の助動詞の活用語承接について—連体形準体法の消滅を背景として—」『国語学』82
- (1976) 「準体助詞「の」の活用語承接について—連体形準体法の消滅との関連—」『立正女子大国文』5
- (1987) 「『天草本平家物語』における連体形準体法について—『寛一本』との比較を中心に消滅過程の検討など—」『近代語研究』7 武蔵野書院
- (1996) 「古代語連体形の構成する句の特質—準体句を中心に句相互の関連性について—」『神女大國文』第7号

- 中山 崇（1950）「準体助詞「の」の通時的研究—特に活用言につく場合について—」『日本文法教室』2
- 広瀬満希子（1991）「『浮世風呂』における命令法について—位相を視点として—」『国文鶴見』第26号
- 松村 明（1957）『江戸語東京語の研究』東京堂
- 柳田征司（1993）「無名詞体言句から準体助詞体言句（「白く咲けるを」から「白く咲いているのを」）への変化」『愛媛大学教育学部紀要 第Ⅱ部人文・社会科学』第25巻2号
- 吉川泰雄（1950）「形式名詞『の』の成立」『日本文法教室』3